

陸前高田の 文化財 2016



気づき
つたえ
活かす

＜生涯学習のつどい＞

◎文化財報告会

開催日時：平成 29 年 2 月 18 日（土）13:30 ～

開催場所：陸前高田市コミュニティホール
（シンガポールホール）

報告内容：中沢遺跡発掘調査

国指定史跡中沢浜貝塚

歴史防災公園整備事業

県指定文化財吉田家住宅復元事業

被災文化財再生事業

◎文化財展示会

開催日：平成 29 年 2 月 14 日（火）

～ 2 月 19 日（日）

開催時間：9:00 ～ 16:30（18 日のみ 17:00 まで）

開催場所：陸前高田市コミュニティホール（中会議室）

お問い合わせ：陸前高田市教育委員会 生涯学習課 0192-54-2111（内線 261）

事前申込不要
入場無料



平成28年度 陸前高田市生涯学習のつどい

陸前高田市文化財報告会 プログラム

- ・ 12 : 00～ 開場・受付開始
- ・ 13 : 30 開 会（司会）
- ・ 13 : 30～13 : 45 挨 拶 山田 市雄（陸前高田市教育委員会教育長）
- ・ 13 : 45～14 : 15 埋蔵文化財調査成果報告
 - ・ 中沢遺跡の発掘調査記録と出土遺物の整理について ・ ・ ・ ・ 1
佐藤 典邦（陸前高田市教育委員会）
- ・ 14 : 15～14 : 45 教育委員会の文化財への取り組み①
 - ・ 中沢浜貝塚歴史防災公園整備事業について ・ ・ ・ ・ 9
増崎 勝仁（陸前高田市教育委員会）
- ・ 14 : 45～15 : 15 教育委員会の文化財への取り組み②
 - ・ 吉田家住宅復元事業について ・ ・ ・ ・ 17
佐々木 賢也（陸前高田市教育委員会）
- ・ 15 : 15～15 : 45 教育委員会の文化財への取り組み③
 - ・ 陸前高田市立博物館における文化財レスキューについて ・ ・ ・ ・ 20
浅川 崇典（陸前高田市立博物館）
- ・ 15 : 45～16 : 00 質疑・応答
- ・ 16 : 00 閉 会（司会）

<埋蔵文化財調査成果報告>

中沢遺跡の発掘調査記録と出土遺物の整理について

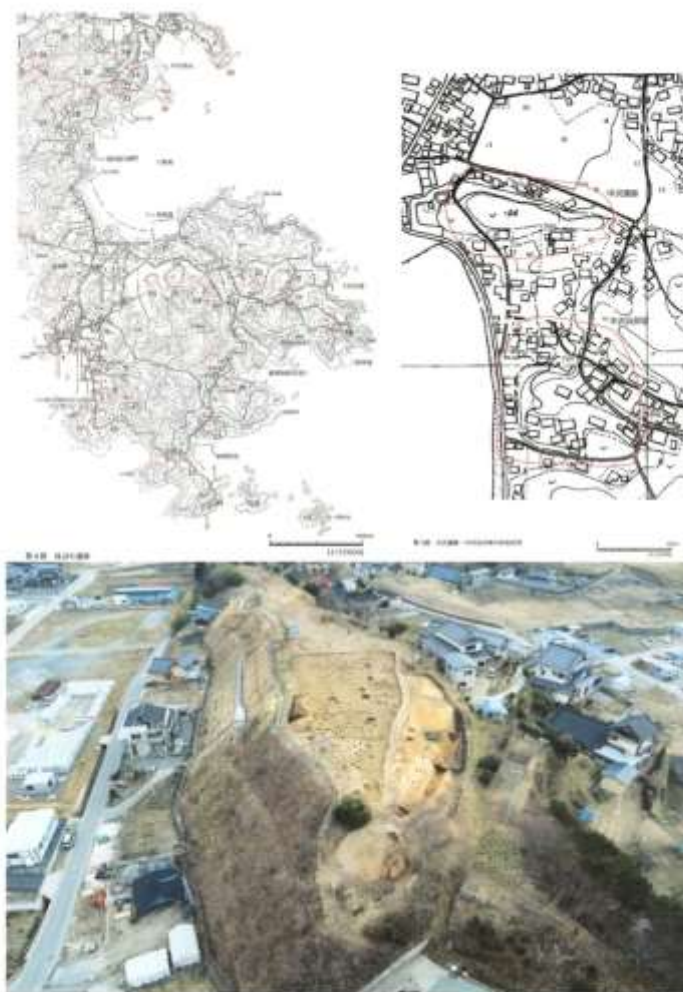
陸前高田市教育委員会生涯学習課
学芸員 佐藤 典邦

1 中沢遺跡の位置

中沢遺跡は広田漁港を望む標高 15～22m の丘陵部に位置していました。平成 25 年 12 月から平成 26 年 3 月の期間、発掘調査が行われました。調査面積は 1637 m²です。

航空写真に地形の特徴がよく表れていますが、遺跡の北側は崩落して急傾斜地でした。

漁港整備以前の旧地形図を見ると、遺跡の真下は砂浜です。南に 250m 離れて、国史跡中沢浜貝塚があります。

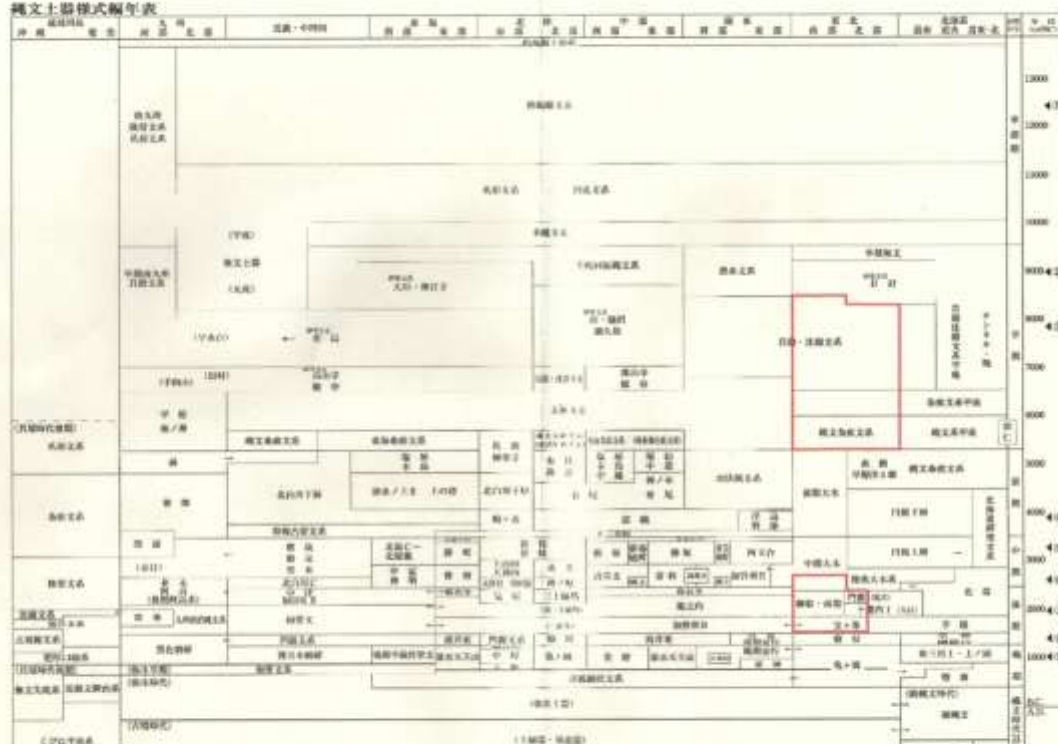


2 調査の概要

北側斜面の崩落によって、丘陵は東西に細長い形をしています。一線は工事区域です。調査区は1区と2区に分かれています。北斜面部には崩落によってできた窪地があり、縄文時代早期後葉の遺物が出土しました。尾根筋には縄文時代中期後葉～後期中葉の土坑(木の実などの貯蔵穴)が並び、南側に縄文時代後期中葉の竪穴住居が発見されました。大きな溝と庇の付いた掘立柱建物・柵は室町時代初め頃に造られたと考えられます。



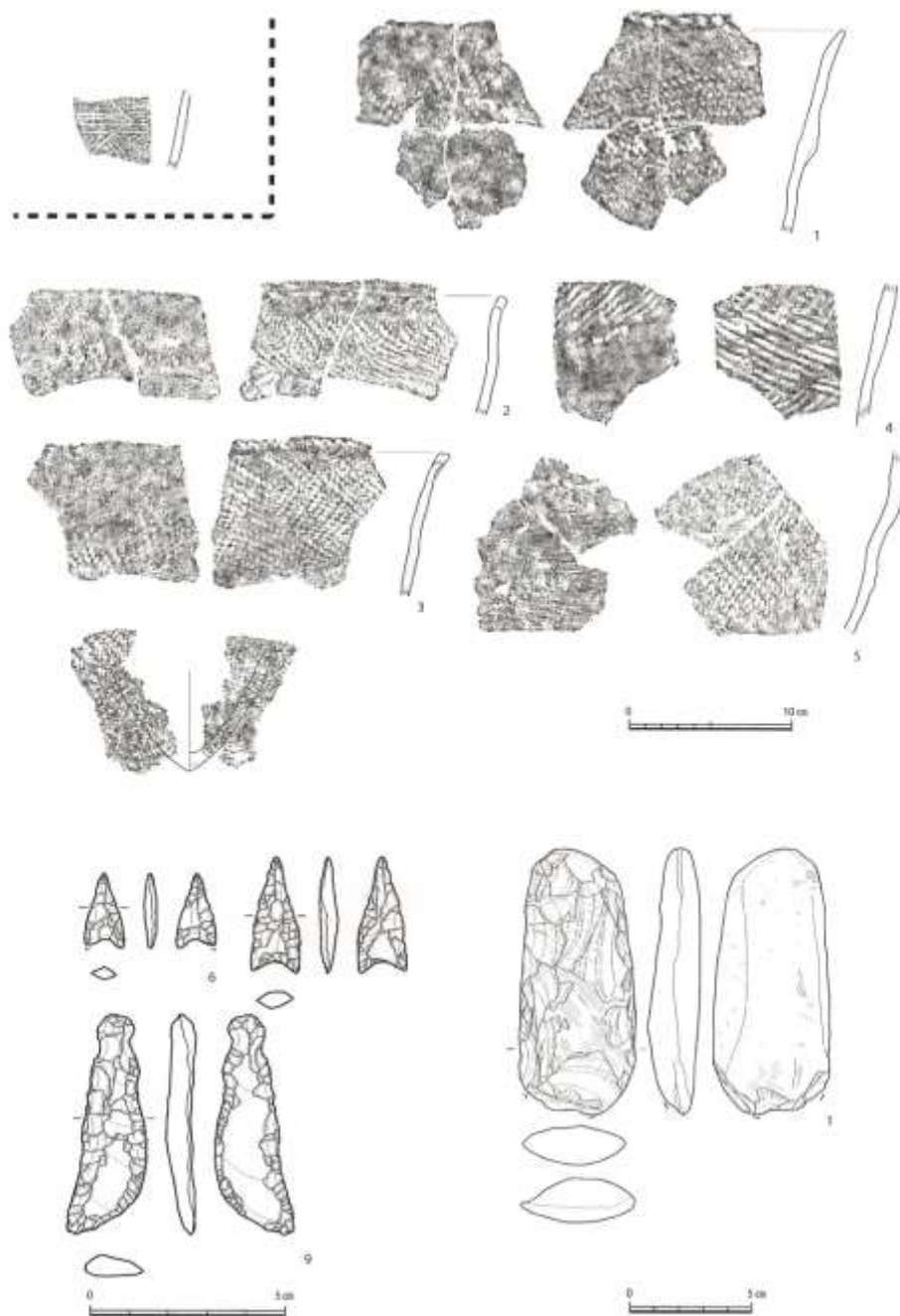
繩文土器樣式幅年表



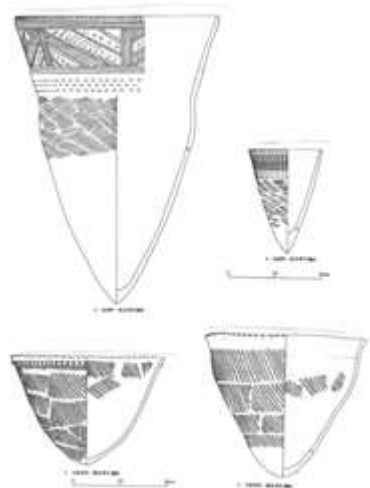
3 縄文時代早期後葉

調査区北側斜面の崩落は、古い時代からはじまったらしく、崖崩れによってできた窪地から縄文時代早期後葉(約 7000 年前) の土器・石器が出土しました。

住田町蔵王洞窟・小松洞窟、大船渡市関谷洞窟から出土した土器と同じ特徴があり、土器の表面と裏面の両方に縄文が付けられています。また、土器の底は尖底(せんてい) といってとがっています。



参考資料 住田町・大船渡市の縄文早期土器

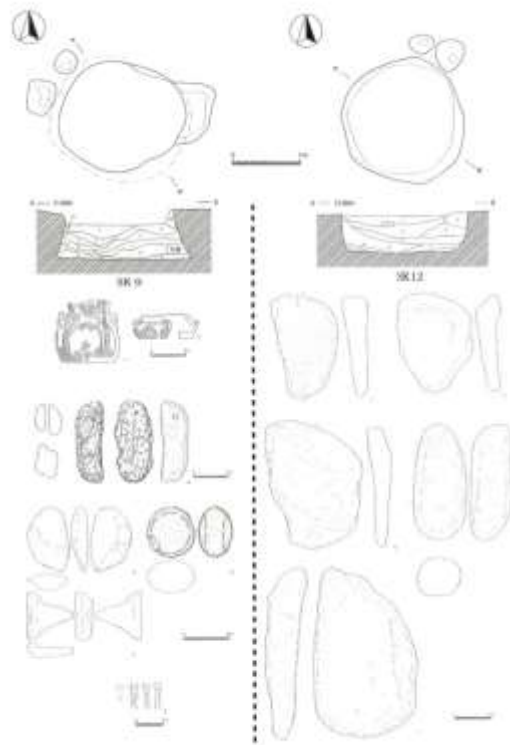


中沢遺跡の早期土器・石器出土の土層



4 縄文時代の土坑（どこう）

東西に細長い丘陵の尾根筋にそって直径 1.5～1.8mの円形土坑（縄文時代中期後葉～後期中葉 約 4500～3500 年前）が掘られています。列状に並んでいました。木の実などを貯蔵するためですが、なかにはゴミ穴として再利用されている土坑があります。9号土坑には魚骨・貝殻が捨てられていました。12号土坑から石皿(いしざら)・磨石(すりいし)が出土しました。



9号土坑の貝層

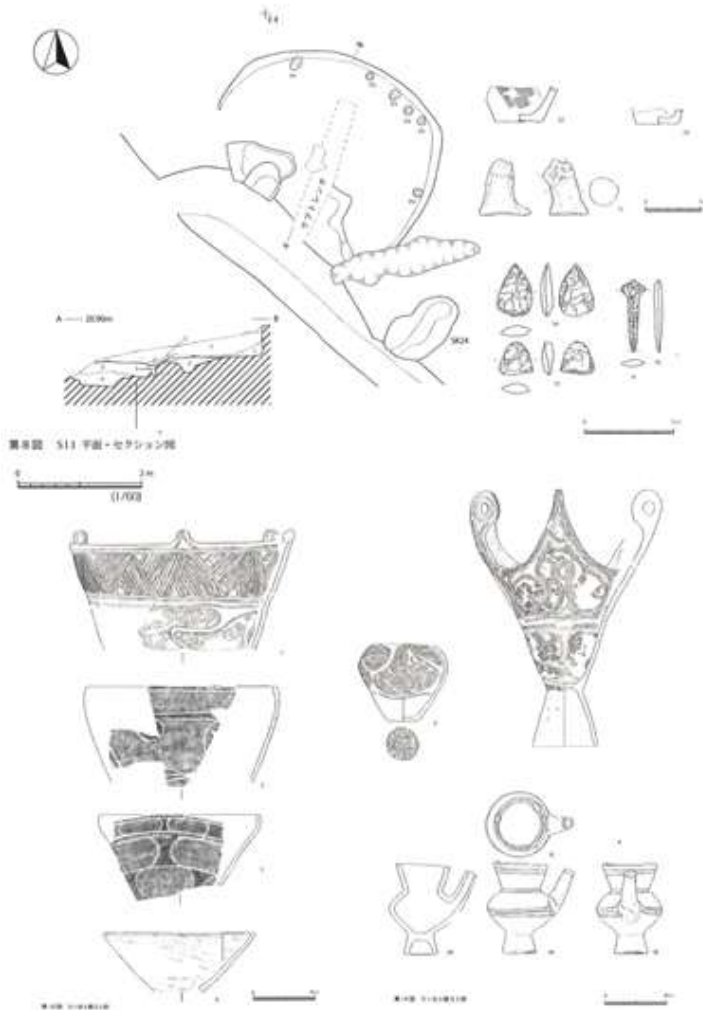


貝はムラサキインコが最も多く、クボガイがこれに次ぐ。

魚はアイナメ・カサゴ・ウミタナゴが多い。そのほか、ニシン科の魚も多く、小形の魚も多く捕られていた。

5 竪穴住居

調査区の南斜面から縄文時代後期中葉（約 3500 年前）の円形の竪穴住居が発見されました。大きさは直径 3.5m と推定されます。残念ながら、南側は斜面の崩落により失われています。さいわい炉と柱穴の一部が残っていました。また、家として利用されなくなって、住居が埋没する途中で土器・石器が捨てられていました。土器は、すぐれた造形の個体が多く出土しました。



注口土器の出土状況

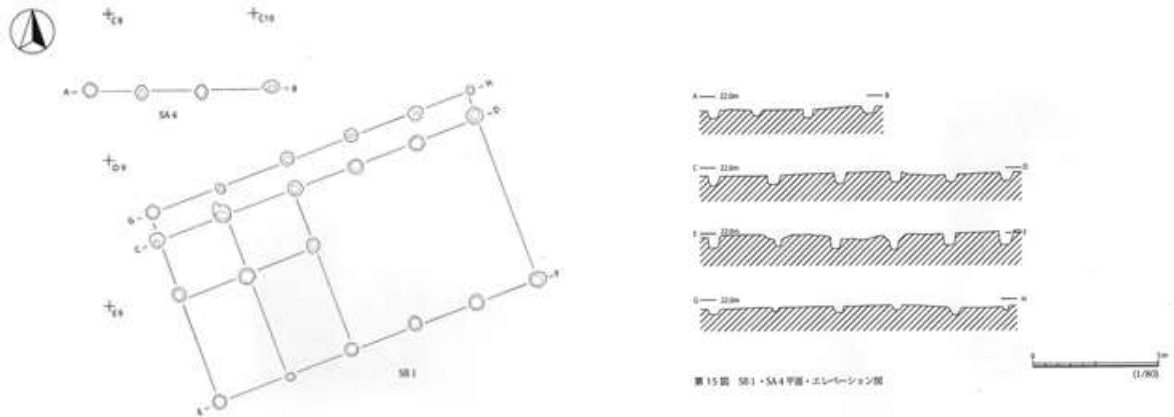


参考 旧石器時代と縄文時代の森林のちがい



6 中世の中沢遺跡

縄文時代後期後葉を最後に、以後しばらくの間、中沢遺跡の丘陵には人が住んだ痕跡はありません。室町時代になると1間×5間東西棟北面庇付きの建物や柵列、南側斜面に幅3m、深さ1.3mの溝が掘られています。溝というよりも堀に近いと思われます。北西に500m離れた位置にある小館遺跡は中世の城館と考えられています。中沢遺跡も城館として使われた可能性があります。



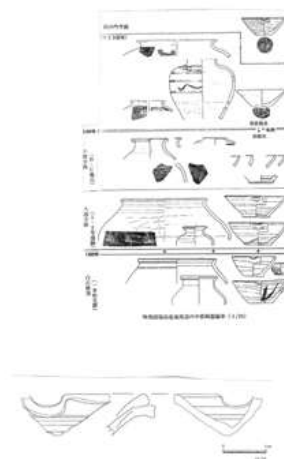
7 まとめ

中沢遺跡は縄文早期後葉・中期中葉～後期中葉・室町時代に、東西に細長い丘陵の狭い平坦面に人が居住しました。

1950年代から70年の間に作られた地形図を見ると丘陵頂部の標高は24mですが、調査開始時点の測量では22mです。70年代以降に丘陵東側の削平が進んだようです。おそらく失われた住居跡もあったと思われますが、広田半島に人が住みはじめたのは縄文時代早期後葉の時代であることがわかりました。また、南に隣接する中沢浜貝塚との関係など検討しなければなりません。中沢遺跡は断続的に人が住んだ遺跡ですが、中沢浜貝塚は長期にわたって継続的です。

これから検討しなければならない問題も多いようです。最後に、冬期間の野外調査に協力いただいた作業員のみなさんに感謝いたします。

参考 中沢遺跡調査区出土の片口鉢

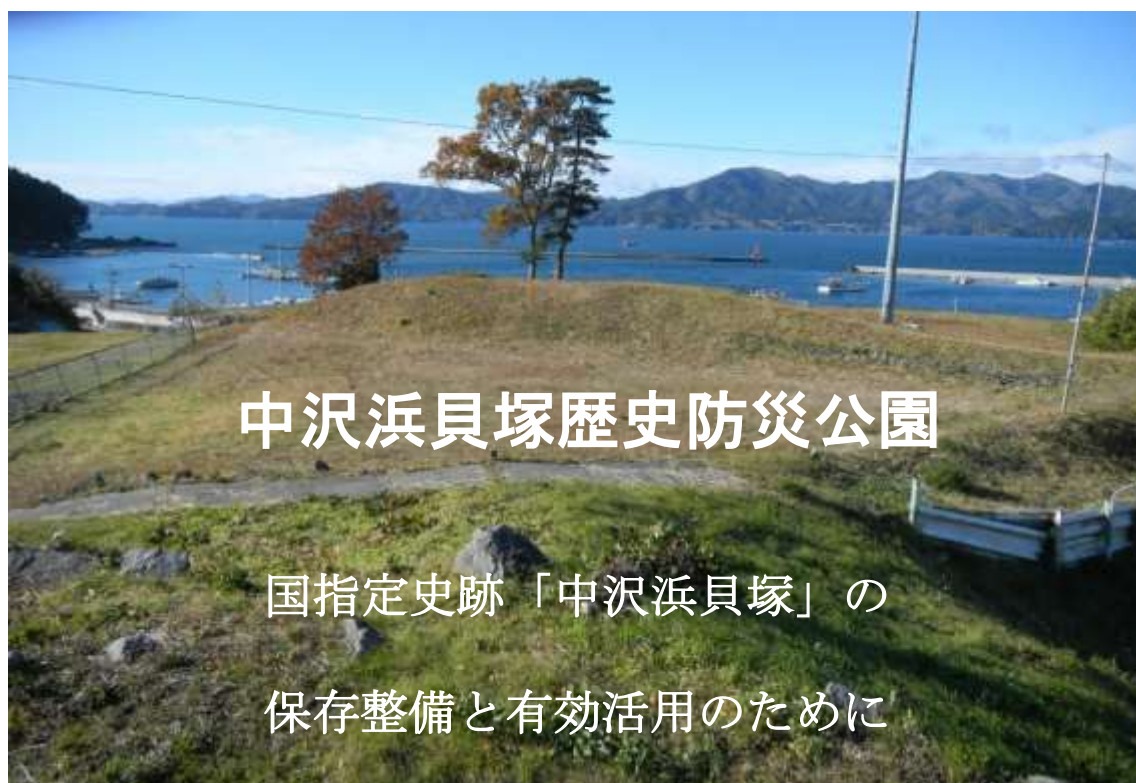


＜教育委員会の文化財への取り組み①＞

中沢浜貝塚歴史防災公園整備事業について

陸前高田市教育委員会生涯学習課

学芸員 増崎 勝仁



防災公園整備の目的

市内各所に残る市指定文化財津波記念碑や口伝にあります先人の教えを守り、二度と悲劇を繰り返さないためにも、地域の防災に必要な緊急避難場所や設備を国指定史跡中沢浜貝塚内に整備します。

公園の整備や設備については、地元の皆様とワークショップを重ね計画しました。

市教育委員会は、国指定史跡中沢浜貝塚の公園整備において防災機能と史跡保護を両立し、公有化を進めている中沢浜貝塚の有効活用を目指しています。

公園内の設備

①避難階段

緊急の場合、港湾部から短時間で避難するための階段。階段の幅、傾斜については、ご老人、子供、障害者の皆様に配慮した幅と傾斜を確保しました。階段の手すり、踏板には過去の津波浸水高を記したプレートを取り付け、日常の防災意識の向上を図りました。

平常時は休憩や観望に利用し、緊急時には柱間をシートで覆うことができ、風雨を防ぎ、状況に応じた使用が可能です。

平常時はベンチとして使用し、緊急時には座面を取り外し、煮炊き用かまどとして転用できます。かまどベンチを設置する場所は、避難場所以外にも利用できる広場として整地します。

園内に太陽光発電式LED照明灯を設置し、夜間緊急時に対応できるようにします。

また、広場入口の自然崩落した斜面部は、既存の石垣とガードレール撤去後、石材を入れた金属製網かごを積み上げ斜面を保護します。

この他に、公園案内看板を設置します。

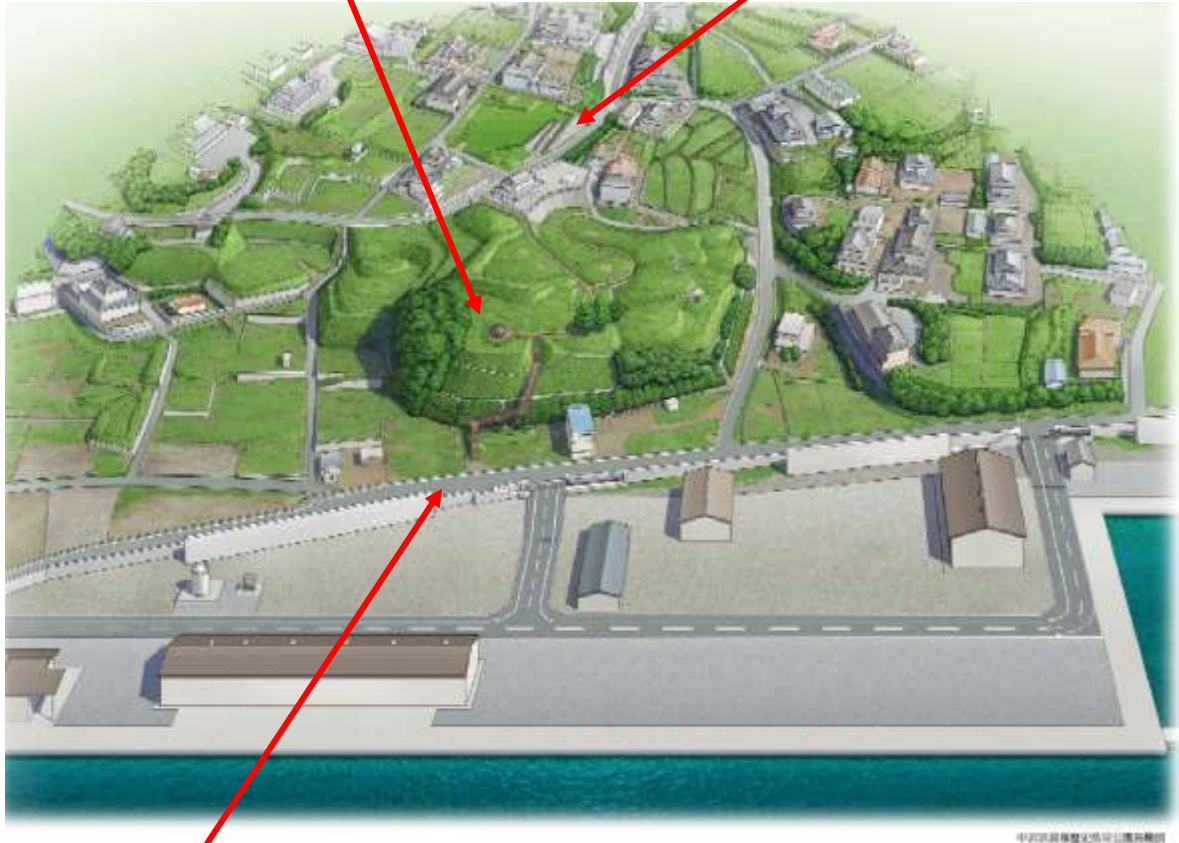




防災型あずまや（2月初旬）



広場階段（2月初旬）



港湾部上空から見た公園整備後の中沢浜貝塚



避難階段（2月初旬）

国指定史跡中沢浜貝塚の歴史的価値

・日本国内での中沢浜貝塚の文化財的評価（文化庁 HP データによる）

日本国内の埋蔵文化財包蔵地の数 約46万か所
 国指定史跡の数 1,760 か所
 岩手県内の国指定史跡の数 30 か所

$1,760 \text{ か所} \div 460,000 \text{ か所} = 0.00382 \dots$ おおよそ0.4%

・中沢浜貝塚が国指定となった特筆すべき重要性

・大船渡廣田兩灣ノ間ニ突出セル半島ノ南端廣田灣ニ臨メル丘陵南北ノ兩斜面ニアリ砂土ヲ以テ覆ハル層ノ厚サハ略■六尺ヨリ十尺ニ及ヘリ層中ニ石器土器骨器及獸骨等ヲ包含シヨク旧態ヲ存ス 一昭和 9 年一

歴史

大昔の暮らしを探る 中沢浜貝塚

中沢浜貝塚は、縄文時代の前期から縄文時代の後期の土器、石器、骨角器、縄文時代の貝類や動物の骨と共に出土し、日本の縄文時代や文化の発展を垣間見るうえで貴重なことから、昭和9年(1934)年に国の史跡となりました。

貝塚から探る、縄文人の暮らし

海と共に生きる文化

平成9年(1997)年、中沢浜貝塚で縄文時代の土器や動物の骨などが出土しました。あちやんと、20歳くらいの女性です。あちやんは縄文時代前期(5千年～6千年前)、動物は、縄文時代中期(5千年～4千年前)の人と考えられています。

女性の骨を調べると、骨や歯を食べていたこと、関節炎に悩まされていたこと、子どもを産んだ経験があることなどがわかりました。身長は155cm位で当時としては高い女性だったようです。これも海の幸が豊富な中沢浜で栄養のある食生活を送っていたためではないでしょうか。

これまでの発掘調査によって、縄文時代前期から縄文時代後期にかけて、あちやんとあちやんの生活の様子を知ることができます。

縄文時代の暮らし

縄文時代は、約1万年から約3,000年前まで続いた時代です。この時代には、狩猟・採集・漁業が主な生活手段であり、農耕や家畜飼育は行われませんでした。

縄文時代の人は、自然を畏れず、自分たちのまわりのものを全てに命があると信じていました。貝塚も貝殻や土器、石器や動物の骨と共に、土器や石器、骨角器や動物の骨や人骨も発見されています。

貝塚は、すべての生き物の墓地であり、貝類や動物の骨の残骸の集積地を込めて設置する。貝塚は場所であったと考えられます。

中沢浜貝塚の出土品

縄文時代の暮らしを、貝塚から探る。縄文時代の暮らしを、貝塚から探る。縄文時代の暮らしを、貝塚から探る。

縄文時代の暮らしを、貝塚から探る。縄文時代の暮らしを、貝塚から探る。縄文時代の暮らしを、貝塚から探る。

中沢浜貝塚と三陸南部貝塚群

三陸南部は、太平洋に出る重要な地域です。日本列島の最南端に位置する中沢浜貝塚は、縄文時代の重要な遺跡です。縄文時代の暮らしを、貝塚から探る。縄文時代の暮らしを、貝塚から探る。縄文時代の暮らしを、貝塚から探る。

縄文時代の暮らしを、貝塚から探る。縄文時代の暮らしを、貝塚から探る。縄文時代の暮らしを、貝塚から探る。

中沢浜貝塚の調査

日本の漁労文化のルーツを示す中沢浜貝塚出土資料

多種多様な骨角製漁労具

- ①離頭鉞・・・・・・大形の魚を捕獲する。現代の突きん棒漁に似た漁法が推定されます。
- ②ヤス・・・・・・水中の魚を突く
- ③釣り針・・・・・・現在とほぼ同じ形、縄文時代から完成された形



縄文時代の漁労の想像図



①離頭鉞



②ヤス



③釣り針

中沢浜貝塚から出土した骨角製漁労具



アオザメ



ネズミザメ



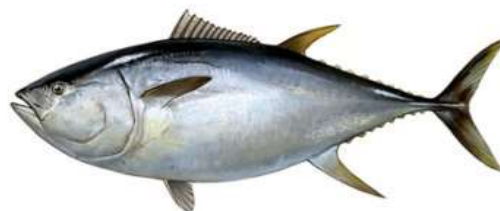
カスザメ



ヨシキリザメ



アカエイ



クロマグロ



マアナゴ



カツオ



ホシザメ



マイワシ



マダイ



サケ



スズキ



ウグイ



ヒラメ



カレイ



アイナメ



フカカサゴ

中沢浜貝塚の人々が食べた主な魚類



イノシシ



イノシシ ウリ坊(こども)



ニホンジカ(雄)



ニホンジカ(雌)



キジ (雄)



キジ (雌)



ヤマドリ(雄)



ヤマドリ(雌)

中沢浜貝塚の人々が食べた主な鳥・哺乳類

中沢浜貝塚歴史防災公園整備関連行事

「史跡中沢浜貝塚」をより深く知り、親しんで、世代を越えて地域の“たから”として誇りとするために。

1 縄文人の生活を疑似体験する。

- ・縄文人の食……………ドングリ・山芋・魚・貝を野外調理
- ・縄文人の技術……………土器・石器・骨角器・装身具・土偶・土鈴・土笛を作る
- ・縄文人の生活空間(環境)……………遺跡内で一晩過ごす(電気なし)

2 中沢浜貝塚考古学クラブ

- ・陸前高田市内の遺跡や出土遺物を教材として、また日本の各地域の遺跡や遺物と比較しながら各時代の歴史を学ぶ。
- ・遺跡発掘調査体験や遺跡見学会を行う。
- ・中沢浜貝塚の発掘や研究の歴史を調査する。

<教育委員会の文化財への取り組み②>

吉田家住宅復元事業について

陸前高田市教育委員会生涯学習課

主査 佐々木 賢也

1 吉田家住宅の概要

「吉田家住宅」とは、仙台藩気仙郡の大肝入屋敷で、後に「大庄屋」と呼ばれた屋敷で、気仙大工（今泉村・七五郎）が享和2年（1802年）に建設した屋敷である。なお、「大肝入」とは、地方の有力者が藩から任命される、村方役人の中でも最上位の役職である。吉田家は、その大肝入を代々務めてきた家である。

吉田家住宅は、平成18年（2006年）9月26日、建築年代や大工の棟梁名が明らかであり、同じ種類の屋敷はほとんど解体されている中、当時の大肝入屋敷の景観をよく伝えていることが指定される理由となり、岩手県指定文化財に指定された。しかし、平成23年3月11日の大津波で全壊流失した。

2 平成28年度までの調査や作業等

- ・平成23年度・・・津波で流失した部材の回収、調査及び仮保管
回収された部材は約1,000本。農業用パイプハウス3棟が建てられ、保管された。
- ・平成24・25年度・・・部材の調査
回収された部材全てに、基礎調査（サイズ計測や破損状況調査など）、洗浄及び写真記録が行われた。調査の結果、回収した部材を使って吉田家住宅を復元できる可能性があること、部材を屋内で保管する必要があることが確認された。
- ・平成26年度・・・住宅跡地試掘確認調査
- ・平成27年度・・・住宅跡地試掘確認調査、部材の安定化处理
吉田家住宅跡地試掘確認調査については、現在報告書を作成中。

- ・平成 28 年度 . . . 部材の安定化処理、部材保管庫の建設、部材の強度確認調査
回収した部材の安定化処理については、塩分除去試験の本試験、高圧洗浄処理、燻蒸処理を行った。安定化処理以外では、部材の強度確認調査、部材保管庫の建設を行った。



部材の塩分除去試験



回収部材の高圧洗浄作業



部材保管庫



部材の燻蒸処理

3 今後の課題

文化財の価値を維持した復元を行うためには、回収した部材について、元々の使用箇所をできるだけ特定し、その場所に使用する計画を策定することが不可欠である。また、その使用箇所に適応した補修も必要となる。

その他、文化財の価値を維持した復元とするには、今泉地区の嵩上げ地に復元する際に、大肝入屋敷の景観を後世に伝えられるように復元することも求められる。

＜教育委員会の文化財への取り組み③＞

陸前高田市立博物館における文化財レスキューについて

陸前高田市立博物館

学芸員 浅川 崇典

1 本市の文化施設の被災状況

平成 23(2011)年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震による大津波は、陸前高田市をはじめとした東日本の太平洋沿岸地域を襲い甚大な被害をもたらした。本市には陸前高田市立博物館（以下博物館）、同図書館、海と貝のミュージアム、埋蔵文化財保管庫の 4 つの文化財関連施設があったが、地震による被害はほとんどなく、大津波によって壊滅的な被害を受けた（図 1～4）。また、施設関係職員 27 名中 19 名が犠牲となるなど、人的被害も非常に大きく、これらの施設に展示・収蔵されていた陸前高田の自然や歴史、文化を後世へ伝える貴重な文化財約 56 万点は、その全てが津波に飲み込まれ、一部（約 10 万点）は流失し、残った資料（約 46 万点）も甚大な被害（海水損）を受けた（図 5、6）。



図 1 被災後の市立博物館



図 2 被災後の海と貝のミュージアム



図 3 被災後の市立図書館



図 4 被災後の埋蔵文化財保管庫



図 5 被災した市立博物館の民俗資料



図 6 市立博物館の被災状況

2 被災資料の救出（一次レスキュー）活動

平成 23 年 3 月 30 日、市教育委員会は一関市博物館に対して、大津波で被災した陸前高田市立図書館に保管してあった岩手県指定文化財『吉田家文書』および関連資料の救援要請を出した。これを受け、岩手県教育委員会、岩手県立博物館および本市職員が協力し、4 月 2 日・3 日の 2 日間にわたり同館所管資料の救援活動を実施した（図 7）。これが陸前高田市における被災文化財等救出活動（一次レスキュー）の初動となる。この救出活動を皮切りに、海と貝のミュージアム、市立博物館、埋蔵文化財保管庫と 4 つの施設において、被災文化財の救出が行われ、岩手県立博物館をはじめとする県内の文化財等関係者や自衛隊が共同で 6 月中旬まで約 9 週間を費やし、約 46 万点の資料を救出した（図 8～10）。



図 7 岩手県立博物館に搬入された吉田家文書



図 8 海と貝のミュージアムにおけるレスキュー作業

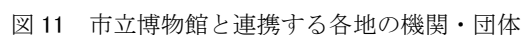


図 9 市立博物館におけるレスキュー作業



図 10 埋蔵文化財保管庫におけるレスキュー作業

東北地方太平洋沖地震に伴う津波は、文化財にとって有害な塩分はもちろん、海底から巻き上げられた汚泥や生活排水等の有害物質を含んでいたため、そのような海水に浸かった資料は、放置すると錆やカビが発生し著しく劣化する危険性があった。そのため、一刻も早く資料中に含まれている劣化要因の除去を行う必要があった。また、救出された資料はその量も膨大であったばかりか、素材が紙、木、土、石、金属、骨、皮革など素材が多岐にわたるため、各素材の特性にあった処理を実施する必要もあった。しかし、これほど多種多様な文化財が海水損した例はなく、国際的に見てもその処理技術は未確立な部分が多いのが現状であった。そのため、文化財科学や保存修復の研究者及び国内の大学や博物館などの多くの専門機関（図 11）と連携し、被災資料の状況に応じ改良を加えながら、一部の被災資料について処理法を構築し、その処理を今日まで行ってきた。



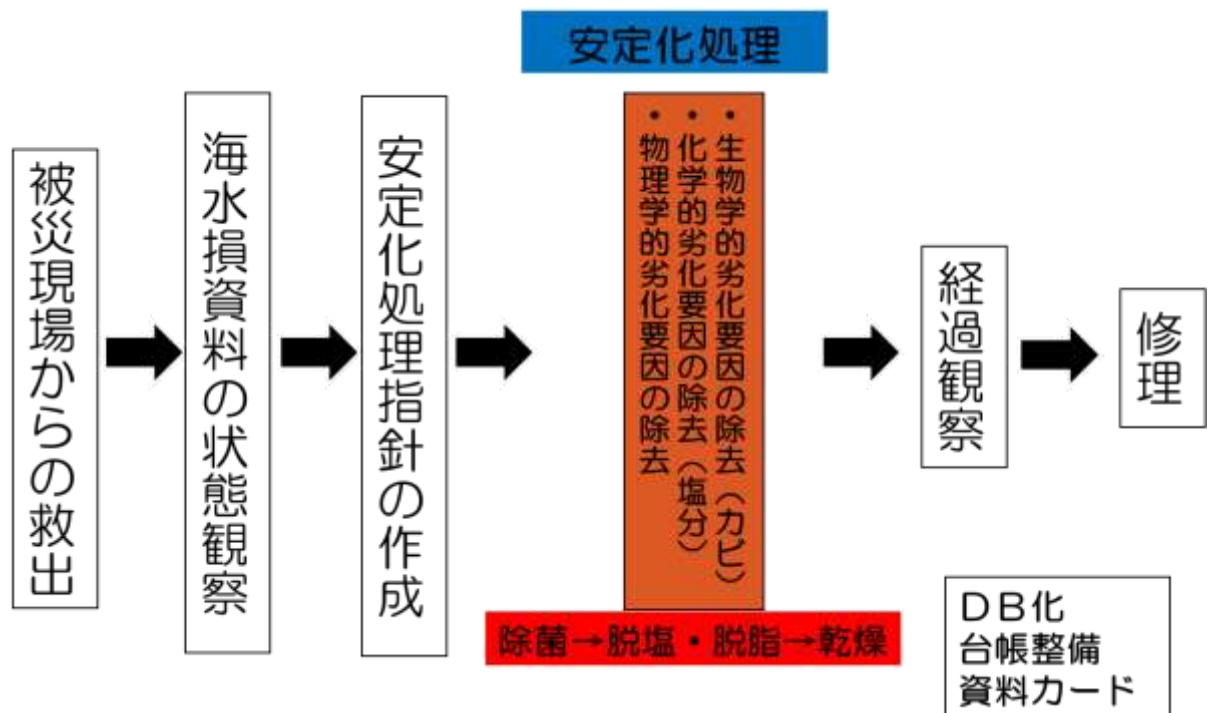


図 12 海水損資料再生への流れ

現在、海水損した文化財の安定化処理は、除泥→脱脂→除菌→脱塩→乾燥→経過観察→本格修理という工程で行われている（図 12）。最も重要なのが塩分の除去を目的とした脱塩である。水道水→精製水に浸漬し、毎日水を交換しながら塩化物イオンが 6 ppm 以下になるまで行う作業である。市立博物館では、古文書や古い教科書といった紙製資料（表 1、図 13、14）や一部の民俗資料（表 2、図 15、16）、貝類標本などは脱塩作業を行うことが可能であるが、水に浸漬することによって描画材料が溶出・剥離する資料（インクで書かれた書簡類、染料を用いた絵図、水彩画等）や、描画材料が剥離する資料（油画等）、革を素材とする資料、長時間にわたる水への浸漬によって下地が溶出し、塗膜が剥離する恐れがある漆工品等（図 17）については、未だ処理方法が未確立である。そのため、このような資料については専門機関と連携しながら技術開発を行いながら今後も継続していく必要があり、完了するまでは相当の時間と労力を要する。

表1 被災紙製資料（古文書）の安定化処理手順

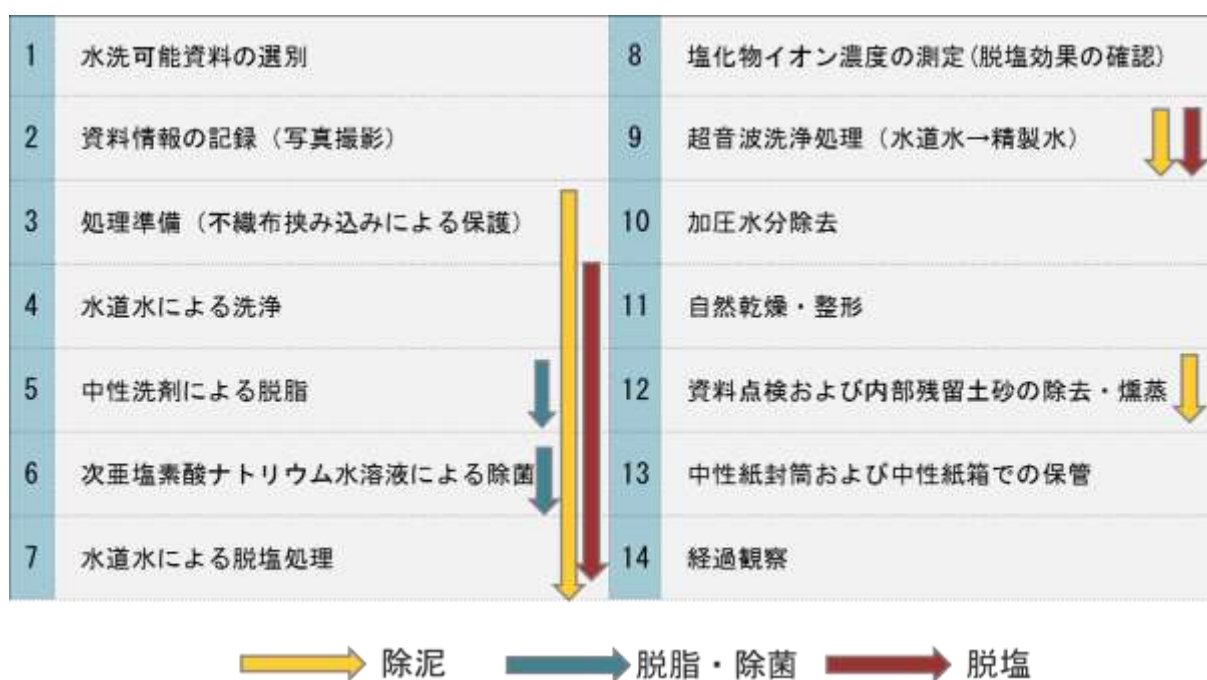


図13 水道水による洗浄の実施



図14 次亜塩素酸ナトリウムによる除菌の実施

表2 被災民俗資料)の安定化処理手順

1	水洗可能資料の選別	←当館では一部を除き 未実施
2	写真撮影	
3	不織布による保護	
4	水道水による洗浄	
5	次亜塩素酸ナトリウム水溶液による除菌・洗浄	
6	水道水による超音波洗浄	
7	水道水による脱塩処理	
8	塩化物イオン濃度の測定	
9	自然乾燥による水分除去	
10	資料点検および内部残留土砂の除去	
11	資料消毒(燻蒸)	
12	抜本修復	
13	経過観察	



図15 水道水による脱塩処理



図16 自然乾燥による水分除去

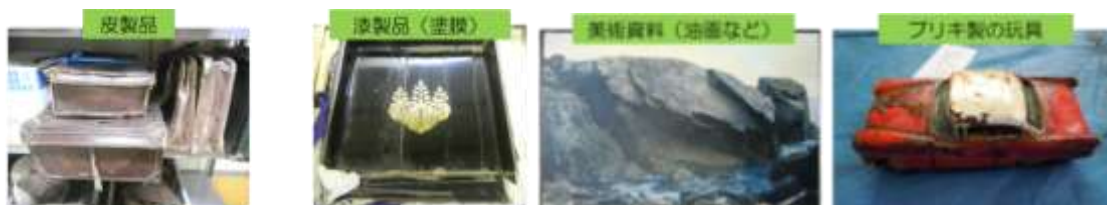


図17 処理方法を構築中の資料

救出された文化財は、陸前高田の自然・歴史・文化を伝えるための大切な「たからもの」。市立博物館では、長期間にわたる地道な再生作業が、休むことなく続けられている。

4 気づき、つたえ、活かす～文化財の残らない復興は本当の復興ではない～

今後、博物館の復旧・復興を円滑に進めるためには、市民の文化活動に対する理解が必要不可欠である。

博物館では、震災以前から市民が民俗資料収集協力員・専門研究員として資料収集活動や教育普及活動などに参加・参画するなど、地域に密着した活動が行われてきた。震災後も、旧生出小学校を仮設博物館として被災資料の安定化処理を実施する傍ら、出前講座や博物館教室を積極的に開催し（図18、19）するなど、教育普及活動も積極的に展開している。さらに、小学生たちのふるさとについて学ぶ機会を増やすために、震災以前から連携関係にあった北里大学海洋生命科学部水圏生態学研究室と共同で、当市の遺跡や民俗芸能、名勝等の“生きた教材”を活用した学習プログラムの作成も行ってきた。当プログラムは小学校の教科単元に対応しており、ふるさと陸前高田について、学校の授業をとおして理解を深められるように工夫されている。

このように、震災以前から市民とともに博物館活動を展開し、理解を培ってきたことによって、震災後も「新しい博物館のために」と民具等の資料寄贈申込みが相次いでいる。このようなふるさと陸前高田を心から愛してやまない市民の想いに応えるべく、一日も早いふるさとの博物館再興を目指し、我々は日々被災文化財の再生に向けた作業にあたっている。

被災地域に伝わる貴重な自然遺産や文化遺産の保存継承を行っていくためには、唯一無二の被災文化財を救出・再生する必要がある。今後は、これまでの活動を糧に新たな活動を軌道に乗せ、被災資料、さらには博物館機能の再生の加速を図り、「ふるさと陸前高田の宝を守り、未来に繋ぐ」という博物館本来の役割を果たしていきたいと考えている。



図18 米崎小学校における出前博物館



図19 矢作小学校児童の博物館教室

